

第9回青森県地方分権推進シンポジウム

基調講演 「地方分権で危機を越える」

講師：東京大学名誉教授 神野 直彦氏

月日：平成24年1月12日（木）

場所：青森国際ホテル 3階「萬葉の間」

●司会者

本日の講師は、東京大学名誉教授 神野直彦様でございます。

神野様は、1946年埼玉県にお生まれになりました。

東京大学経済学部をご卒業後、日産自動車株式会社を経て、大阪市立大学経済学部助教授、東京大学経済学部教授、同大学院経済学研究科教授、関西学院大学大学院教授等を歴任なされ、現在は地方財政審議会会長、地域主権戦略会議構成員、政府税制調査会専門家委員会委員長、日本自治学会会長等の役職をお務めでございます。

また、平成21年には紫綬褒章を受章されておられます。

本日は、「地方分権で危機を越える」という演題でご講演をいただきます。

神野様、よろしくお願いたします。

どうぞ大きな拍手でお迎えください。

●神野氏

ご紹介にあずかりました神野でございます。

このような席にお招きにあずかりましたことを三村知事をはじめ、ご関連の皆様方に深く感謝申し上げる次第でございます。

お手元にレジユメがいつているかと思いますが、「地方分権で危機を越える」というテーマでお話をさせていただきます。

地方分権ということが、私達今、危機の時代にきているわけですが、この危機の時代から脱出する導き星になるのだということを今日お話させていただこうと思っております。

右上の方には、ドイツのケルンの真っ暗な地下壕の中から発見されました、つまり第二次世界大戦の時の地下壕から発見されたいたずら書きを書いております。

そこには、

わたしは日が照っていないときでも太陽の存在を信じます

愛を感じるができなくても愛の存在を信じます

神が沈黙しているときでも神の存在を信じます

というふうに書かれておりました。

私達日本は、ご案内のとおり、東日本大震災という自然災害の危機に見舞われているわけですが、危機は本質をあぶり出してくれます。私達日本人は、この東日本大震災という危機の中で、私が整理いたしますと3つぐらい社会の本質に気がついたというふうに言っ

ていいのではないかと思います。

1つは、人間の社会で最も価値のあるものは人間の命だということですね。社会の価値体系の1番上、最高位には、人間の生命を置く、そういう社会を形成しなければならないという生命意識、これを自覚するようになった。

さらに、人間の命、生命の活動である「生きる」ということは、共にするものなんだ。これは、人間と人間が命、生きるということと共にするということだけではなく、人間と自然とが生きるということと共にするということなんだと。それが重要だという、共生意識ですね。これは絆とか寄り添うとかという言葉で表現されておりますけども、共生意識に気がついた。

同時に、共に生きていく、人間と一緒に、共に生きていくことによって遭遇する、出会う様々な問題、これについては、これまでのように傍観者としてただ眺めているだけ、手をこまねいて眺めているだけではなく、自ら積極的にその解決に参加していく必要があるんだという参加意識ですね、この3つが芽生えたのではないかと思います。

今日も後で様々な市民組織の方がご登壇されますが、この市民組織も同じことですね。こうした3つのこと、3つの意識に基づいて組織化されるはずであります。

日本は、ともするとこうした意識を今までは失っていたということですね。共生意識というのは、定義をしておきますと、競争原理の反対です。競争原理というのは、誰かが成功すると誰かが失敗する。誰かが失敗すれば自分は成功という関係ですね。

共生意識というのはそうではありません。社会の構成員の誰もが、誰もに対して不幸にならないということを願い、誰もが誰もに対して幸福になるということを願っているんだという確信です。

家族を思い起こしてください。家族の中では、誰もが誰もに対して不幸にならないことを願い、誰もが誰もに対して幸福になるということを願っているという確信があるはずですよ。他の誰かが不幸になれば自分も不幸になってしまう。競争原理というのはそうじゃないんですよ。誰かが不幸になってくると自分が幸福になるわけで、自分が不幸になれば誰かが幸福になる。

こういう関係が競争原理なのに対して、そうではない原理ですね。これが徐々に徐々に日本の家族、その他の機能が失われはじめました。特に高齢化社会になってきてこういうことが始まると、私の恩師で大内力先生は、私は生きているうちで国から二度お国のために死んでくれというふうに言われた。一度は戦争中ですね。お国のために死んでくれと言われたと。もう1回は現在だ。医療費が高騰して大変なので、お国のために死んでくれないかと、今、言われている。というふうに言って、百に達することなくお亡くなりになりました。私も徐々にそういう年代に近づいてくると、ひしひしと早く死んで欲しいという圧力を、プレッシャーを感じます。

私達が小さい頃には、「親孝行 したい時には親はなし」こういうふうに使われていたんですが、今の若い人達は、「親孝行 したくもないのに親がいる」こういうふうに使ってい

るんですね。そういうことではなく、偽善でも欺瞞でもなく、日本人は、今、生命意識、共生意識、参加意識を取り戻して、新しい社会を作らなくちゃ駄目だというふうに、この災害で気がつきはじめたはずです。これが、地方分権のほうですね。

つまり地方分権というのは何か、共に生きていくということ。そして、様々な共同の問題に共通に参加して解決しよう。そして、その地域社会で育む命、これを最も重視しているという考え方に根ざしているはずでございます。

お手元、おめくりいただきます。

私達が今、そういう意味で危機の時代に生きていて、危機が本質をあぶり出してくれているというお話をいたしました。私共日本は二重の危機にあえいでいます。

1つは、言うまでもありませんが、東日本大震災という津波によって襲われた、津波によって生じた危機ですね。

もう1つ危機がありまして、これは百年に一度の危機と言われているように、2008年、リーマンショックというのが起きて以来、世界経済が陥っている世界恐慌というふうにも呼んでもいいような経済的な危機ですね。これが第二幕、第三幕が今、起きようとしております。

百年の一度の危機というふうに言ったのは、叫んだのは、グリーンズパンという人ですけども、グリーンズパンは、百年に一度の危機がきたと言ったんじゃないんですね。百年に一度の津波がきた、「TSUNAMI」って言っています。これは、ハワイ諸島を津波が襲った時に日系の移民達が「TSUNAMIがきた」って言ったものですので、「TSUNAMI」という言葉がアメリカをはじめとして世界的に津波を表現する言葉として定着をした。そういう意味からいうと、自然災害としての津波と世界経済危機としての「TSUNAMI」という2つの二重の危機に日本はあえいでいるのではないかと思います。

さて、第一の方の東日本大震災の危機は、この危機は地方分権をすることによって解消していくしかないだろうというふうに思います。それは、これまで私達日本は、災害の多い国として、関東大震災とか阪神淡路大震災とか、という大災害を経験しておりますが、いずれも大都市という、同質の地域社会を襲った大災害ですので、これは中央集権的にもできません。都市計画を作って簡単に再興して復興させていくということが出来るわけですけども、今回の東日本大震災は、そうはいきません。皆さんもご存知のとおり、この東日本大震災は、漁村から農村、表現すれば仙台以北では主として漁村。仙台以南では漁村に農村、さらにそこに中小の都市、それに加えて仙台市のような大都市というような様々な多様な地域社会を巻き込んでいる大災害であるということですね。

さらにこれに加えて、皆さんもご案内のとおり、原発の事故が起きております。つまり、地球は宇宙のオアシスと言われておりまして、宇宙の星の中でも命を育てている星です。その星が下手をすると、生命の無い星になってしまうかもしれないという悲劇に繋がりがかねないような大災害などを起こしているわけです。

こういう多様な地域社会を巻き込んだ災害については、どういう地域社会を災害が起き

た大地の上に創り上げていくのかというのは、その地域社会で生活をする人が決定しなくちゃいけないということです。財源とか知恵とか、様々な復興に必要なものは支援する。これは日本国民の任務ですね。しかし決定は、あくまでも現場のというか、その地域社会で生きていく人々に任せるべきである。サポート・バット・ノットコントロール、支援すれども介入せず、という原則、これを守っていく必要があるだろうと思います。

阪神淡路大震災が起きた後、2年8か月後にヨーロッパのジャーナリスト達が集まって行ったシンポジウムの中で、「2年8か月経ってここまで復興したのか」「素晴らしい」「フランスだったら10年掛かる」こういうふうには復興を称えながら、一方で欠陥を指摘しています。この復興する過程で、各首長、知事、市町村長が何百回となく2年8か月の中で中央政府に陳情に行っている。これは陳情復興だ。日本は3割自治と言われていますが、8割5分自治と言われているデンマークのジャーナリストは、「信じられない」と。「何故、その地域社会が自分達で復興したいことを自分達で決められないのか」というふうに言うておりました。

同時に、確かに街並み、道路は復興したけれども、2年8か月経って復興したけれども、仮設住宅は未だ解消されず、孤独死、自殺などの様々な悲劇が続いている。「これは、生活復興ではなく開発復興だ」というふうに指摘しております。私達は、こうした過去の過ちを二度と繰り返してはならないと思います。

さらに今度はもう1つ、「TSUNAMI」という世界的な大不況ですが、この大不況はどうして起きているのかというと、これは大量生産、大量消費の工業社会の時代が終わって、多品種少量生産の知識社会と言われているような社会に向かう、そういう歴史の峠で起きる危機、これが現在の危機だというふうに考えられると思います。

危機というのは、中国語で「ウェイキ」ですね。最初の「ウェイ」は、危ういということの意味ですし、後の「キ」の方は、変化するという意味ですので、危うく変化するという意味です。英語で言いますと「クライシス」というふうに言いますが、「クライシス」というのは分かれ道という意味です。「クライシス」という状態は、医学で言いますと、お医者さんが「今晚がこの山の峠です」と言った時の「峠」という状態が「クライシス」、危機という状態です。従って、結論は2つしかないんですね。肯定的な解決か破局かです。

この経済的な危機、3という所を見ていただければと思います。百年に一度の危機ですので、前の危機は何時だったのか。これは言うまでもありません、1929年、世界恐慌ですね。日本で言えば昭和恐慌という時代ですが、この時の危機はどういう意味があったのかというと、軽工業の時代で、その上に小さな政府と言われている自由主義国家があって、その世界の自由主義国家が覇権国、イギリスがまとめる、パクス・ブリタニカの時代だった。これが最終的に崩壊をして、第二次世界大戦という悲劇を通じますが、第二次世界大戦後、重化学工業を基軸にして、その上に大きな政府と言われている福祉国家を作り、それをアメリカという覇権国がまとめる、パクス・アメリカーナ。この時代が今、最終的に終わりを告げようとしている。そういう危機だというふうにお考えいただければと思いま

す。

この時代の終わりなんです、これは、大量生産、大量消費の時代が、重化学工業の時代が終わりを告げたということですね。これは、1973年の石油ショックあたりから始まります。石油ショックが起きて、1973年にはブレトンウッズ体制、第二次世界大戦後の世界の自由な貿易構造を作ったブレトンウッズ体制、1ドル360円、固定為替相場で行っていたわけですが、これが最終的に崩れるのが1973年ですね。

私達は、1929年の世界恐慌で経済がブロック化始めます。経済が、覇権国が世界をまとめて自由多角的な貿易構造を作ることができないと、経済がブロック化していくわけですね。スターリングブロックというのをイギリスが作り始めて、あとは仲間に入れませんかというようなことをやり始めると、世界が分裂して世界戦争に入っちゃうわけですね。その反省に則って、第二次世界大戦後はアメリカを中心に1ドル360円、固定為替相場を作ってドルという基軸通貨だけが金兌換、金と兌換をするという制度を作り上げました。これが現在綻び、破綻して、そしてアメリカが覇権国として世界の自由貿易、自由多角的な貿易構造をまとめることができなくなったので、TPPというようなブロック経済を作り始めるわけです。これはブロック経済です。自由貿易じゃありません。自由貿易というのは、世界的に自由多角的な貿易構造を作らなくちゃいけないわけですが、仲間に入った所だけ自由貿易、貿易を自由にしますよというのは、これは自由貿易でも何でもありません。

そうして世界が分断して分裂していく、そういう時代に現在、差しかかっているわけですね。私達は、この時にやらなければならないこと、産業構造を変えることです。量の経済を質の経済に変えていく。大量生産、大量消費は駄目なんですね。自然資源、石油をはじめとする自然資源が悲鳴を上げるように枯渇し始め、もうこの大量生産、大量消費は無理だという警告を加えているわけです。人間は、その代わりに何を使えばいいか。それは知恵です。知恵を使って、量を質に変えていく。これこそが、これからやらなければならない経済です。

私達は人間、経済というのは、人間が自然に働き掛けて人間に生きていくために必要なものを作り出すわけですね。人間が、従って農業とか漁業という一次産業はなくなることはありません。これを無くしたら人間は生きていけませんので。

人間がまず生きている自然に働き掛けて、人間が生きていくために必要なものに変えていくわけですが、その時に人間は知恵を使ったり情報を使います。情報って、インフォメーション、「インフォルメラ」というのが原語ですので、形を与えるものという意味ですね。鉄鉱石から鉄の鋳を作る時には、鉄鉱石に対して私達は情報、知識を入れ込んで鉄の鋳にするわけです。しかし、鉄の鋳ではなく、心臓のペースメーカーを作る時には、自然に存在する物量に対して、圧倒的に大量の知識、情報を入れ込んで、自然を変えていくわけです。そういう人間の知恵、知識を圧倒的に使う時代になってくる。何故か、それは自然資源をなるべく使わないようにしなくちゃいけないからですね。量を質に変える経済に

変えないと、もう上手くいかなくなる。

この量を質に変えるものは、もう一度レジユメの2に戻っていただきますと、2の(2)の「TSUNAMI」による危機の2番目に書きまして、量を質に変えるというのは、それぞれの人間がもっている掛替えのない知的能力です。

現在、電力危機ですが、自然科学で最も重要な法則に熱力学の第一法則と第二法則があります。熱力学の第一法則というのは、エネルギーは、エネルギーの量は一定で、エネルギーというのは、生産することも消費することもできない。これが、熱力学の第一法則ですね。エネルギーは生産することができません。形を変えることができます。

エネルギーの第二法則は、エネルギーは生産することも消費することもできないけれども、エネルギーには「エクセルギー」という質があって、エネルギーの質は高い方から低い方に無限の均衡運動を行っていく、というのがエネルギーの第二法則です。

私達の経済というのは、これからやらなければならないのはエネルギーの第二法則。つまり、質を考えたエネルギーの使い方を考えていかないと駄目だということですね。

条件によってエネルギーは、例えば、私が今、エネルギーを使って上へ上げてやると、この水は位置が上になりますと位置エネルギーを持って仕事をする力が。エクセルギーというのは、仕事をする力、仕事をする能力のことです。できるという能力のことですね。これが熱エネルギーは極めて質の低いエネルギーです。仕事があまりできないんですね。それに対して、電気エネルギーは極めて質の高いエネルギーです。いろんな仕事ができるんですね。電気分解もできればコンピュータを起動させることもできれば、勿論、熱エネルギーと同じように暖めることさえできるわけです。

それに対して熱エネルギーは単純なことしかできませんので、私達は部屋を暖めるというようなことのために電気を使っちゃ駄目なんですね。エイモリー・ロビンズという世界で最も有名なエネルギー学者は、「部屋を暖めるのに電気を使うということは、電動のこぎりでバターを切るのと同じぐらい愚かなことだ。」と言っています。

つまり、熱エネルギーとして暖めるだけであれば、これはわざわざ電気に変えてやる必要はない。

スウェーデンのエコビレッジに行っていたら、家々に黒いパネルが屋根に張ってありますけども、これはわざわざ電気に変えません。そのまま太陽光の熱エネルギーを吸収して、その熱エネルギー、非常に低温の熱エネルギーですが、これを集めてヒートポンプでもって高温にしてやったり、逆に冷やしてやるというようにすればいいので、熱エネルギーは熱エネルギーのまま使えばいいわけですね。

そして、家々の明かりについては、集落ごとの本当に小さなバイオマスの発電所で済みますから、バイオマスの発電所でおが屑でもって、ペレットでもって電気を発電してあげて行く。そして、水力発電とか火力発電とか、という大規模な発電は、質の高い電気のエネルギーではないと無理なもの。つまり、コンピュータを起動させるとか、電気分解をするとか、ということにのみ使っていく。これが人間と自然との質量変換、物質代謝で経済

を最も効率的にやるということです。

日本はすぐ一律カットってやるんですが、一律カットは何の意味もないですね。

私は、網膜はく離で目が見えなくなるわけですけども、元々普通の人には近眼が歳を取るにつれて止まるんですが、止まらないでずっと近眼のまま進んでいって、最後に失明するわけですが。身を持って言える結論は、教訓は、物事は目先だけの利益を追って、近視眼的なものの見方をしていると、待っているのは暗黒だけだということですね。

この間、目が見えないものですので、テレビは聞くだけです、テレビを聞いていたら、あるニュースキャスターが、「今、日本の電力の30%は原子力発電、原発に依存しています。原発は止めなさい、という人がいるけども、原子力発電を止めるということは、3割の供給量を失うことです。あとは、30%が天然ガスで30%は石炭で発電しています。これ、全部輸入ですよ。従って、原発を止めるということは、今よりも30%電気の供給能力が少なくてもいいと。それで我慢をするということです。国民は本当に今よりも電力が30%も少ない社会に生きていけるんですか。そういうライフスタイル、生活様式ができるんですか。」って脅しているんですね。

うちの家内などは呑気ですから、それを聞いていて、その後よせばいいのに、そのキャスターが「今よりも電気の供給量が30%少なかった時代というのは、今から20年前です。20年前の生活にあなた、戻れるんでしょうか。」というふうに言うわけです。そうするとうちの家内はそれを聞いていて「エッ、20年前ったらバブルの時じゃない。あの時みたいに電気使いまくっていいのね」って。いいんです。これは何故か。

それは、今から20年前から今、電気の使用量を増やしているわけですが、何に使っているのか。これは私は全く無罪です。何故なら、私は目に、網膜はく離で目に光源を見ることができませんので、パソコンその他使えません。今から20年前から電気で使用量が増えたのは何か。皆、IT関係なんですね。

思い出してください、10年前までは1つの課に1台ぐらいしかなかったパソコンが全部入ってきて、サーバーその他で電力を沢山使っているんです。もしもそういう電力の使い方は、これは人間の歴史の発展にとって止められないのだといえ、コンピュータというのは、さっきも言いましたように電力という質の高いエネルギーでしかできませんから、質の低いエネルギーでできることを電力を使わないようにするということができないですね。暖めることとか、何とか止めましょうと。皆、パソコンだけに使いましょう、ということにライフスタイルを変えていくということをやるとはできないわけです。

ただし、現在、世界では、一日に2,000億メール、メールが飛び交っています。2,000億メールですよ。そのうちの1,800億メールは不必要なメールなんです。つまり迷惑メールなんですね。これを消すのに3秒間の電気が必要になります。

東京大学の情報工学で皆さんご存知の月尾先生が計算すると、年間に世界でメールを消すために110兆円の電気を使うんです。世界のGDPは5,000兆円ですから、大体、人々が苦勞して作り上げたものの2%から3%はメールを消すために使っている。そういう社

会に今、なっているということですね。

ただ、いずれにしても、私達は、質を考えて、量から質に経済を動かしていかなければならない。それは、農業も同じことですね。農業というのは、自然の恵みですから、自然が人間と同じように労働する、そういう産業です。しかも農業というのは、極めて知識集約的な産業です。これは、簡単にできるような話じゃないですよ。諸葛亮孔明みたいにあらゆる天文学から始まって、様々な知識の必要な産業なんですね。それを日本の農政の大きな失敗は、農業の工業化。工業と同じように考えて、工業というのは、死んだ自然の中で動いている産業ですので、生きて自然の中で動いている産業じゃないんですね。

そういう論理をそのまま農業に適応したために、コンクリートを投下すると農業生産性が上がるとか、そういう発想方法になってしまったのですが、今、世界、特に北ヨーロッパが進めているような知識集約農業、知識を使って、知識を投下して私達が働き掛ける自然をより豊かな自然、より恵み多い自然にしていこうという方向に作っていかねばならないわけで、つまり、自然を豊かに、つまり知識集約型農業への転換を図っていく必要がある。

スウェーデンでは、子ども達に次のように教えています。

私達の人間の欲求には2種類あります。1つは、所有欲求です。これはハビング、持つことの欲求です。

もう1つの欲求は、存在欲求で、ビーイングの欲求です。

所有欲求が満たされると、所有欲求というのは、人間の外に外在して、人間の外に存在するものを所有することによって満たされる欲求なんですが、外在している、人間の外に存在するものを所有することによって、人間は豊かさを感じます。

それから存在欲求というのは、触れ合うことですね。人間と人間が触れ合うこと。人間が、人間と自然が触れ合うこと。もう少し言えば、人間と人間が調和すること。人間と自然が調和すること。共生といっても構いません。人間と人間が共に生きること。人間と自然とが共に生きることによって、充足される欲求です。この存在欲求が充足されると、人間は幸福を感じます。幸せを感じます。

子ども達に「あなた方の人生を振り返ってみなさい。幸せだなと感じる時を見てみなさい。母親との触れ合いとか、家族との触れ合いとか友情とかの触れ合いとか、そういう中で満たされていくでしょう。」というふうに教えているわけです。

工業社会、私達のこれまで工業社会は、存在欲求を犠牲にして、所有欲求を満たしていた社会なんです。何故なら、私達人間に忌まわしくまとわりついていた貧困、つまり欠乏ということをどうにか脱出するためには、それが必要だったんです。しかし、今、人間はある程度の所有欲求は満たせたので、これからは存在欲求。つまり、人間の人間的な欲求である幸福を求めます。そういう人間的な社会になることができるんですよ、というふうに教えています。

何か日本では、今、二言目には金が無いって言うんですけど、私などのような年老いた

人間から言うと、私の子ども時代は、本当にお金が無い時代でした。お砂糖も食べるのがままならず、お酒屋さんから新聞紙にお砂糖を買って、「これが甘さか」っていうようなことを味わう時代だったんですね。しかし、皆、子ども達、笑顔で笑っていました。

それを私達自身の存在欲求というようなものが満たされていたからなんですね。

ところが、現在ではどうかというと、町から子どもの笑顔が消え始めているんですね。ヨーロッパの人々が日本に来て、日本人を見てびっくりしました。いろんな印象記を、開国されて、明治維新で開国されて印象記を残しているんですが、日本人の特色として指摘しているのが3つあります。優しさですね。日本人というのは、どうしてこんなに優しいんだろう。もう1つ、謙譲です。日本人は、どうしてこんなに自己主張しないで譲るんだろう。もう1つは、日本人は、どうしてこんなにゆとりがあるんだろう。ということにびっくりしているんですね。

それから、いろんな印象記が、特色ではないんですが、日本で見られる現象として指摘していることは、日本の子ども達はどうして笑っているんだろうと。日本の町々には、どうして子ども達の笑顔が溢れているんだろうと、こういうことを残しているんですね。

私達は、この間、こういうことを失えと教えてきました。優しさなんか持ったらモラルハザードが働いて負けるぞ。競争に負けるぞ。譲ったら駄目だ。自己の権利をもっと主張しろ。

それから、ゆとりなんか持ったら駄目だ、もっとギスギスしごけというような、そういうことですね。子ども達の笑顔もなくなりました。

しかし、私達の子どもの頃は、まだ町々には子ども達の笑顔が溢れていました。その時代の心意気、精神的なスクリーマーはその時代のバックグラウンドミュージックのように流れる歌謡曲に反映されます。私達が子どもの頃には、ハナ肇とクレージーキャッツというグループサウンズがいて、このグループサウンズは何て歌っていたのか。「金の無い奴は俺んどこに来い。俺も無いけど心配するな。」って歌ったんですよ。貧しいんですよ。

しかし今、日本では何をやっているのか。日本に今、金が無いんだ。金が問題なんだ。金が無い奴は出て行ってってくれって、こういう発想ですね。これは、物事、何も解決しない。

私達は、この歴史の大きな転換期を乗り越えるのに必要なのは、希望と楽観視を携えることですね。

さて、この世界的な恐慌というのは、さっきも言いましたように、重化学工業の時代がいよいよ行き詰まりを告げてきた。そして、第二次世界大戦後、世界の先進国は福祉国家、第二次世界大戦後、福祉国家という大きな政府を目指したんですが、それが行き詰まり始めました。行き詰まり始めたのが、1973年だというお話は、先ほどしたとおりです。石油ショックが起きて、ブレトンウッズ体制という世界の通貨制度が混乱してしまった。

そのあたりからガタガタ言い始めて、今、最終的にその終わりを告げる恐慌、世界恐慌が起きている。1929年、この間の世界恐慌でいうと、第一次世界大戦後あたりからガタガタガタガタ言い始めて、金本位制復帰だ、金本位制復帰だって言いながら、結局、1929年

で最終的に崩壊していくような、そういう時期にいるということですね。

私達は、こういう歴史の大きな大転換期にどうしたらいいのか。今度は地方分権で越えなければならないというので4ページ目、4を見てください。

世界が、社会が危機的な状況に陥った時に政府の任務は何かというと2つあります。1つは、社会で営まれている人間の生活に対して、安全のネットを張ってやること。セーフティネットを張ってやることですね。時代が行き詰っているので、新しい産業などについて、新しい産業や仕事づくりについて、冒険してもらわなくちゃいけませんと。しかし、冒険して失敗しても、生活がちゃんとできるように政府がネットを張ってありますからね。ちょうどサーカスの綱渡りや空中ブランコの芸人達が落ちても死なないように引いてあるネットを引いてあげることですね。

もう1つは、次の産業構造の前提条件、このことをインフラストラクチュアと言います。重化学工業の時代であれば、インフラストラクチュアは全国的な鉄道網とか道路網とかというような全国的な交通網と全国的なエネルギー網ですから、そうしたことを整備して、新しい産業構造が出てくるのを待つ。

19世紀の末あたりから、軽工業の時代が行き詰まり始めると、ドイツの鉄血宰相ビスマルクは、世界で初めて社会保険を導入して安全のネット、セーフティネットを社会保険で完備しましたよと。安心して新しい仕事づくりに冒険してくださいね、ということと同時に鉄血宰相ですから、全国的な鉄道網、その他を引いて重化学工業が新しく出てくるのを待つ。これは民間がやる仕事ですね、冒険するのは。

さて、そういうことからいくと、第二次世界大戦後、先ほども言いましたように、世界の先進国は福祉国家を目指して社会保障を充実させたんですが、それが行き詰まり始めた。そうすると、考え方が幾つか出てきますね。アングロサクソン諸国、日本、アメリカ、イギリスのような国々は、社会保障を効率化して削っていこう。小さくしていこう。そうすれば行き詰った経済成長も経済成長するようになるという国と、それからヨーロッパ社会経済モデルといいまして、確かに福祉国家は行き詰ったんだけど、福祉国家の持っていた良い所、福祉や雇用を重視していくというメリットを生かしながら、新しい状況でそれを再生することができないかと考えたヨーロッパ諸国があります。ヨーロッパ諸国に2つできます。1つは、ヨーロッパ大陸モデルと言われているフランスやドイツとスカンジナビア諸国ですね。これを見ていただきますと、フランス、ドイツ、日本、スウェーデン、イギリス、アメリカと並べておいて、社会保障を見ていただきますと、GDPで見ていただくと、アメリカ、日本、イギリス 20%ギリギリですが、いずれにしてもアングロサクソン諸国は 20%いかないんですね。社会保障が小さくしていますから。

それらに対してフランス、ドイツ、スウェーデンというのは 20%を超えて 30%にも達しようという社会保障を充実させている。

これと経済成長を 10 年間でとっておきますので、10 年間でとって経済成長を見るとどうか。経済成長しているのはスウェーデン、非常に社会保障の大きい国です。

フランスは、スウェーデンよりも社会保障は大きいんですが、経済成長はあまりしていない。

日本も同じですね。日本は、社会保障は小さいんですが、アメリカよりも経済成長していない。

さて、もう1つ、経済発展というのは、単に経済成長をするということだけではなく、格差や貧困が解消されていなければなりません。このことは、今度の中国の習近平体制でもこのことを取ります。習近平は、今度の第5か年計画では、これまでは経済増長方式、増加の増に長、これは日本語に訳すと成長ということですので、経済不成長方式と言っていたのを改めて経済発展方式とすると。これは何か。格差の是正、貧困の解消に取り組みということを意味するんですね。これまでのように低賃金、低コストで経済成長してきた中国の発展方式を改めよう。そういう方向に舵を切っていきます。

この格差を見ていただきますと、格差はジニ係数が大きいほど格差が大きいので、世界で最も格差が大きい国、アメリカですね。日本は、それに肉薄するような形で格差は大きくなっていると。OECD諸国の半分以上になっているわけですね。

それから貧困率を見ていただきますと、貧困率は世界で一番貧困の激しいのはアメリカ。そして、OECDが勧告をこの間したように、日本はそれに肉薄して第2位につけているぞと。ドイツも最近急激に貧困が増えてきています。

しかし、スウェーデン、フランス、特にスウェーデンは貧困が少ない。ドイツも最近はずえたんですが少ない。

これを見ていただければ分かりますが、社会保障を充実していくということと、経済成長とは関係がないけれども、社会保障を充実しないと格差や貧困は必ず拡大するということですね。従って、経済成長と格差と貧困の解消を両立させようとする、社会保障を充実させていくしかないということです。社会保障を充実させると、財政が赤字になるか、そんなことはありません。これを見ていただければ分かりますが、財政収支を見ていただきますと、スウェーデン、あんなに大きな政府なのにも関わらず、財政は黒字です。デンマークも黒字ですよ。

ちなみに、昨年度上半期でスウェーデンの経済成長率は6%です。そして財政は黒字です。公的債務残高は減らし続けているということですね。

さて、それに対して赤字の大きい国、これは10年間の平均でとっているからなんで、日本、アングロサクソン諸国ですね、小さな政府を目指している国は皆、赤。それどころじゃないんですね。あつという間にイギリスとアメリカに財政収支の赤字では日本は抜かれました。既にイギリスもアメリカも10%超えています。そしてフランスが追いついてきて、ドイツもヒタヒタと日本に追いついてきているというような状況で、日本は胸を張って財政赤字の大きい国だと言えなくなっているんです。完全にもう抜かれましたから。

従って、今、財政赤字が大変だと言っているのは、財政収支の赤字幅を言っているのではなく、累積債務残高。これまでの借金の累積が大変なんだということだけ強調するとい

うことに変えています。

さて、こうした格差を変えていくのに、実は奇妙な法則がございまして、それは、再分配のパラドックスというのがある、これは、現金給付、貧しい人々に限定をして現金給付、現金を配れば、配るほど、その社会は貧困が激しくなって格差は拡大するというのが再分配のパラドックスです。いいですね。政府の任務というのは、安全のネットを張ることですから、福祉国家というのは、市場の方では弱肉強食、優勝劣敗で競争してください。その代わりに、そこで負けたらば、政府が市場の外側でお金を配って国民の生活は守りますよと、こういう国家だったわけですね。

しかし、そういうお金を配る時に貧しい人々に限定をしてお金を配るようにすると、格差と貧困は拡大するというのが再分配のパラドックスです。簡単に言えば、生活保護を充実し拡大していくと、貧困と格差は拡大するということです。

再分配のパラドックスという5ページ目を見てください。

社会的扶助支出というのがありますが、これは生活保護だと思って構いません。見ていただきますと、アメリカ、イギリスのようなアングロサクソンモデル、これは真に貧しい人々にお金を配るという考え方が強いものですので、生活保護のウェイトは高いわけですね。配っていない国はどこか。スウェーデン、デンマーク、スカンジナビアモデルですね、1.5、1.4。ドイツ、フランスはその中間。あと、ジニ係数を見てください。ジニ係数というのは、大きい方が格差が大きいんですよ。アメリカ、イギリスは格差が大きくて、スウェーデン、デンマークは格差が小さい。解消している。そして、ドイツとフランスはその中間。

相対的貧困率を見ていただきましょうか。アメリカやイギリスは貧困が大きい。スウェーデンは生活保護が非常に少ないので貧困が少なく、そしてドイツやフランスはその中間。何が決まるのか。1番右側ですね。社会的支出が決めちゃうんです。

もうちょっと具体的に、6ページ目を見てください。

社会保障を棒グラフで表しています。今世界で最も社会保障のウェイトが高い国、これはフランスです。それについてスウェーデンなんですね。

さて、日本とドイツ、フランス、スウェーデン、見ていただいて、何が特色かという、1番下、高齢者現金、これは年金です。年金は日本、まあまあまどころか、スウェーデンを抜いています、もう既に。その次の医療保険、これは疾病保険です。いいですね、医療保険。これもまあまあです。スウェーデンと比べていただいても、ドイツと比べていただいてもまあまあですね。その次の家族現金、これは子ども手当です。子ども手当スウェーデン1.4幾つ、日本は0.43かなんかですね。これを見ていただくと少ないわけですね。これ、ちょっと上げると大変ですよ、ばら撒きだと非難が起こるわけです。

さて、ここまでが、皆さん分かりますね、お金を配った社会保障で旧来型の社会保障、福祉国家型の社会保障だというふうに考えていただければいいかと思います。ここだけで見ると、フランス、ドイツは、スウェーデンを圧倒しているんです。スウェーデン、スカ

ンジナビア諸国の特色は、その後で逆転していくんですね。その後は何か。高齢者現物。これはサービス給付です。お金は配らないんです。ケア、介護を含む広い意味での養老サービス。高齢者福祉サービス。これを見ていただくとスウェーデンは4点幾つぐらいですよ。ドイツは、ごく僅かで0.5幾つ。日本は1点幾つと小さくなりますね。これはドイツも同じことです。いいですか、ドイツも重化学工業の発想方法ですから、ドイツは。保守主義的な考え方をしますので、女性は家庭の中において、家族の面倒なんか見るのが女性の任務だと、こういう考え方が非常に強いわけです。従って、お年寄りの面倒なんていうのは、女性が見ればいいんじゃないですか、という考え方になっていますので、サービスは出ていかない。

その次の家族現物、これは保育ですよ。育児。育児を見ていただくと、スウェーデンは1.8幾つぐらいですね。それからドイツはその半分の0.7幾つ。日本はそのまた半分の0.3幾つというふうになってしまう。お年寄りの面倒とか、子ども達の育児は、これは女性が家庭の中でやればいいんじゃないの？という考え方が強いからですね。

さてもう1つ重要なのは、その他の中ですが、この中で1番重要なのは積極的労働市場政策、アクティベーション。つまり、今は重化学工業の時代ではないので、今まで旋盤工だった人をプログラマーや中学校の理科の先生なんかにしていくという再訓練、再教育ですね。これはサービスでやることです。これは、人間というのは、本当に素晴らしいものですね。私がおりました東京大学の経済学部はずっといらしていた世界的な労働経済の権威であるストックホルム大学の先生は、50歳までトラックの運転手をやっていたんですね。それからもう1回勉強し直して、世界的な学者になれる。人間は、幾つからでも本当に素晴らしい能力を発揮できる、そういう存在なんですね。日本でも50幾つになってから白井晟一という人がドイツに留学をして、有名な建築家になっていくわけです、世界的な。そういう再訓練、再教育をやっているかやっていないか。

さて、日本の特色は何か。それは、日本の社会保障の特色は、年金と医療保険とそれ以外はないんです。スウェーデンやドイツやフランスを見ていただくと、年金と医療保険とそれ以外が3本柱になっていると。しかも、スウェーデンを見ていただくと、それ以外の中でも育児とか養老とか、再訓練、再教育のサービス給付、お金を配るのではなくてサービスを提供するというウェイトが非常に高い。サービス給付は誰の責任か。地方自治体の責任です。お金を配るのは誰の責任か。これは中央政府の責任です。いいですか、生活保護みたいなお金を、地方自治体ごとにやらせたら、どういうことになるか、例えば青森市が生活保護を充実させる。ウェイトを高くするということをすると、周りから貧しい人々がワッと流入してきます。所得再分配というのは、お金持ちに税金かけて貧しい人の分をもたなければいけないので、お金持ちに重税を掛けざるを得なくなります。

そうすると、当然ですが、お金持ちは青森市から逃げていっちゃうわけですね。その後、貧乏の人が追っかけていくというのは、財政学では、追跡効果といいます。追跡効果がおきちゃうわけです。何故か、それは地方自治体というのは、国境を管理しない政府で、出

入り自由な政府だからなんですね。それに対して、中央政府というのは、国境を管理して出入り自由な政府ではないので、所得再分配できるんです。

ところが、サービス給付は、これは中央政府はできません。いいですか、国立の附属幼稚園全部造るとか、国立の附属保育所を全部造るとか、全国津々浦々、直轄しなくちゃいけないわけで、出先機関全部作ってやらざるを得なくなるわけですね。育児にしる養老にしる、国が全部やろうとしたら。ということよりも重要な点は、サービス給付というのは、それぞれの地域社会の生活様式に合わせて提供されなければならないので、それぞれの自治体ごとで徹底した方が良いわけですね。

つまり、福祉国家が行き詰って中央集権的な再分配をする福祉国家が行き詰って、むしろサービス給付に変えていく、いかないと重化学工業の時代からサービスとか知識を中心とした社会に移れないので、従って、地方分権をしていくということになるわけです。

いいですか、つまり、1929年の世界恐慌までは、男性は労働市場に働きに行っていました。1929年までの軽工業の主要産業である製糸業、綿織物業で働いているのは、皆女性です、女工さんです。女性が人生の一時期、家計補充的に労働に行くというのが軽工業の時代なんです。重化学工業になると、どうしても筋肉労働が大量に必要となりますので、主として男性が働きに行き、女性がシャドーワーク、影法師のように家庭内で福祉の生産をする。これが、産業構造が変わってソフトな産業、サービスとか知識集約産業が出てくると、女性がワッと働きに行く市場ができる。そうやってきた時に、そこを地方自治体のサービスで出していけないと何が起こるか。労働市場が二極しますね。つまり、片一方で2つの労働者が出てくる。1つは、家庭内でのアンペイドワーク、無償労働、家事労働から解放されて労働市場に出ていく人、主としては男性。

それから、家庭内で育児とか養老とか様々な家事労働をやりながら労働市場に出ていく人、女性が出てくると、労働市場がパートの労働市場とフルタイムの労働市場、非正規の労働市場と正規の労働市場に分断されて、賃金の格差が拡大し、そして貧困と格差が拡大していくんです。

産業構造を新しい産業構造に変えていかないと、もう成長する産業じゃありませんから、重化学工業というのは。結局伸びないんですね。むしろ、フレキシキュリティと言って、デンマークなどでやっている政策というのは、解雇をしやすくしてしましましょう。簡単に解雇できるようにしてしましましょうと。これは日本と違うんですね。日本が解雇しやすくするというのは、賃金を低めるためです。賃金を低めるためではなくて、産業構造を変えるには、重化学工業のような時代遅れの産業に雇用されていては困るので、早く辞めてもらうために簡単に首を切るようにしちゃった。その代わりに、首を切られても寛容な社会保障、ちゃんと政府が責任を持って生活の面倒をみますから、これはセキュリティ、フレキシキュリティ、そしてもう1つ重要なんですね。アクティベーション、新しい、産業構造を変えることが目的ですから、新しい産業構造、新しい仕事の方に移っていく方向に訓練をして、再訓練、再教育をして移しますよと。これは、ゴールドトラリアングル、

黄金の三角形と言われている政策です。

そういうことをして産業構造を変えたところが、スウェーデンのように経済成長もし、格差も貧困も小さくなる。このフレキシキュリティという政策の担い手はどこか。サービス給付ですから、地方自治体が担うしかない。地方自治体に財源と権限を与えて、その地域ごとに必要な生活様式を支えるサービスと。それから、新しい産業構造を目指す、どんな地域社会を作っていくのかということに気付いていく、これが地方分権の目的なんですね。それに成功している国、スウェーデン、スカンジナビア諸国は経済成長もし、格差も貧困も解消している。しかし、ドイツなどは、これは後でEUのソブリンリスクがどうして起こるのかというのは説明してもいいんですが、ちょっと時間がなくなっていますので、後にいたしまして、これは今日は省かせていただきますが。

いずれにしても、7ページを見ていただければと思います。地方分権のアジェンダというのは何かというと、これは、地方分権推進法でも謳われておりますが、ゆとりと豊かさが実感できる社会。1995年にできた法律ですよ。私達はゆとりと豊かさが実感できるということは、今や身近な所で育児とか養老とか、それから様々な教育サービス、いつでもやり直しがきく教育サービスとかを提供してもらって、ゆとりと豊かさが実感できるような社会を作っていくために地方分権をやっていくんだ。そして、日本における地方分権の車の両輪というふうに書きましたが、日本の場合には、北風の統制と名づけておりますが、国が命令をして地方自治体に仕事をやらせる、機関委任事務ですね。これは廃止しましたけども、現実には様々な規制が残っています。

それからもう1つは、自分達の仕事をやるだけの財源が明確に与えられていない。これは、地方税を増やすと同時に交付税、財政調整を必要としていくということができていないからですね。

さっきも申し上げましたように、日本ではサービス給付、育児も養老もできない。産婦人科って書いてあっても子どもを産ませてもらえない。公立病院しか、今、できなくなっちゃっていますから。周産期医療ですね。小児科と産科が消え始めた。子どもを産めないわけですね。子どもを産めないと大変なことですよ。日本は、ちょっと下賤な話で申し訳ありませんが、ギリシャのようになったら大変だって言いますが、ギリシャのようにはなりません。セックスの回数の統計を見ると、日本は世界で突出してセックスの回数が少ないんですね。45回です、年間。統計がある中でビッケから2番目。東アジアは回数が少ないんですが、ビッケから2番目がシンガポールですが、これは74回ですので半分以下、半分ぐらいなんですね。世界で一番セックス回数の多い国はどこか、ギリシャ、138回ですから、とてもギリシャのようにはなれませんので、少子高齢化は進まざるを得ないですね。

7番目、私達は社会の基礎単位としてコミュニティがある。ここは後で読んでいただければ分かります。最初に私達の大災害で、この大災害で本質をあぶり出してくれた、ということに戻ります。人間の命が1番大切に、自然には景観とって地域ごとの顔があるんです、雨量とか雪の量、様々な風とか何とか自然の顔があって、その顔に合わせるように

地域ごとに人間の暮らしがある。人間の暮らしでは、相互扶助と助け合いと共同事業。これはお祭りも共同事業ですからね。お祭りというのは、あらゆる職業を超えて準備をすることが重要で、その準備の過程そのものが防災活動にもなり、防犯活動にもなっていて、コミュニティの力を強めていくわけですね。

そして人間の生命、命はそういうコミュニティが育んでいき、そしてコミュニティ同士が、コミュニティでは人間同士が協力し合い、大気、水、土、そういう母体とする自然景観と共に生きることによって、人間の生命の維持と再生産が起きていく。コミュニティの生活細胞として市町村があり、同じ生活細胞が集まって道府県、広域自治体が出来上がっていく。つまり心臓とか、同じ細胞が集まって心臓とか胃が出て、人間全体が出来上がるようにできていく、というのが、私達の社会でこれを点として考えておいてはいけないということです。

時間がもう過ぎたので、ちょっと最後の 11 ページ。

10 番目を見ていただければと思います。

これは社会心理学で言われている言葉で「予言の自己成就」これは、未来はこうなるということを信じれば信じるほど、そうなる確率は高まるという意味です。つまり、悲観的な未来を描けば、そうなる確率は高まるし、楽観的な、肯定的な未来を描けば、そうなることは高まるということです。

私の推測では、未来は、これはスウェーデンの女性の環境学者が言っていることですが、私達の未来は懐かしいものになる。私達が育った時に子ども達は2つの木陰で育ちました。1つは自然が織り成す、本当の緑が織り成している木陰ですね。もう1つは、人間と人間の絆、これが作り出す木陰。この2つの木陰の中で子ども達は育っていたんですね。そういう懐かしい未来になる。それは、知識というのは、お互いに与え合うものだからですね。

そして、私達の地域というのが生命と共生と参加。最初に戻って、その場として再生させること。これは地方分権の目的で目指すことを間違えてはならないということですね。

最後の 12 ページ。

1929 年の世界恐慌の時にアカデミー主演女優賞をもらったアメリカの恋人と言われている女優メアリ・ピックフォードの言葉を書いております。

間違いをしてもやり直す機会は必ずあります

なぜなら、わたしたちが「失敗」と呼ぶものは

転んだことではなく 転んだまま起き上がらないことなのですから

という言葉 最後に私のまとまりのないお話を終わらせていただきます。

時間オーバーしたことと、最後、時間が足りなくなったことをお詫び申し上げまして、私の話をこれで終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

●司会者

神野様、ありがとうございました。

神野様は、スケジュールのご都合により、ここで退席なさいます。

どうぞ皆様、大きな拍手をお掛けくださいますよう、お願い申し上げます。

神野様、ありがとうございました。

ではこれより、5分間の休憩を取らせていただきます。